

黄源盛纂輯

『大理院民事判例輯存』

西 英 昭

本資料集は、中華民国北洋政府時期に最高裁判所として機能した大理院によって下された民事事件に関する主要な判決例を収集・整理したものであり、黄源盛氏（輔仁大學法律學院教授、以下、著者）の二〇年近くに及ぶ作業の集大成として刊行されたものである。評者は院生時代に著者から直接にこの話を伺い、その後も折に触れてこの編纂の苦勞話を伺ってきたが、今回著者が心血を注がれた資料集がついに完結したとの一報に接し、まさに万感胸に迫るものがあつた。法制史学のみならず、中華民国史研究全体へも多大な貢獻をなすであろう本資料集について、以下に紹介を試みたいと思う。

一 本資料集刊行に至る経緯

著者自身によれば、話は一九九四年に遡る。同年の中国法制史学会（台北）での黄靜嘉氏の報告により、南京・中国第二歴史檔案館における一五六五一巻に及ぶ大理院判決例資料の保存状況が明らかになったことが発端となり、著

者はその整理・研究を手掛けることを決意するが、これは爾來資料集の刊行まで実に二〇年弱にわたる壮大な計画が開始された瞬間でもあつたのである。

中国第二歴史檔案館との粘り強い交渉を経てようやく原資料の閲覧に漕ぎ着けた著者は、一九九八年に至つてその概要を学界に報告し、膨大な原資料の中から主要判決例と思われるものを選び出し、その整理に着手した。主要判決例といつてもその数は数千件に及び、かつ全く未整理のままであつた。著者はひとまずこれらを『大理院民事判例全文彙編』（二七冊）、『大理院民事判決匯覽』（二五冊）、『大理院刑事判例全文彙編』（二七冊）、『大理院刑事判決匯覽』（三〇冊）（以上すべて台北・行政院国家科学委員会「民初司法檔案整編」專題研究計画における未刊稿・一九九八年）という形で資料集の形にまとめ上げ公開した。ただこれらは広く一般に向けて公開されたものではなく、また資料集といつても原資料を影印して順に配列したものであつたため、原本それ自体の体裁の不統一もあつて利用し辛い面は否定できなかった。

そこで著者はこれらの判決例を全て新たに活字に起こして体裁を整え、さらに句読点を付して文章を整えるという作業を次に行った。門外漢の方はたかが句読点を付すだけの作業ではないかと思われるかもしれないが、それが如何

に大変なことであるかは、中国史を志した人間であれば日々に沁みて感じるところであろう。しかも、この判決例における中国語は、清朝の官方文書の用語とも異なり、さりとて完全な白話でもない、ある種移行期の独特の文体であり、さらにその中に法律用語がちりばめられ、非常に読みづらいものとなっている。古今の典籍に通じ、流麗にして典雅、光彩陸離たる文章を自在に操る著者をしてなおその読解にはしばしば難渋させられるというものであった。何度見直してもそのたびに問題点が見つかる、と著者が長嘆息されていたのを評者はよく覚えている。

以上の気の遠くなるような作業を続けながら、著者は一方でいち早くこの資料を一般に公開すべく、黃源盛纂輯『景印大理院民事判例百選』（台北：五南圖書出版股份有限公司・二〇〇九）を上梓し、主要判決例について原資料の風合いそのままの影印本として提供し、他方で粘り強い編纂作業を継続し、このたびようやく完成、出版に至ったのである。本書評ではそのうち民事部分について以下取り扱うことにする。

二 本資料集の内容・体裁

本資料集は犁齋法制史料叢編の第四として公刊されている。⁽³⁾ まずは全一一巻の全容を以下に示そう。

批評と紹介 西

總則編 二一四＋四十五＋八十六＋七頁（台北：元照出版有限公司・二〇一二年二月・七〇〇元）

債權編 一（八十八＋二十一＋二十六＋五十二＋五九二＋一八頁）、二（八十二＋二十一＋二十二＋六十五＋五八六＋一八頁）、三（六十一＋二十二＋一二十六＋五十二＋六三〇＋一八頁）、四（六十八＋二十一＋二十六＋五十二＋五九六＋一八頁）（台北：犁齋社・二〇一二年一月・二四〇〇〇元（四冊））

物權編 上（八十二＋二十一＋四十二＋五二十六＋五十六頁）、下（八十六＋四十二＋一四十二＋五二十六＋六十六頁）（台北：犁齋社・二〇一二年一月・一五〇〇〇元（二冊））

親屬編 上（六十二＋一四十二＋五十四＋六〇四＋一二頁）、下（六十六＋二十二＋一四十二＋五十四＋五九八＋一二頁）（台北：犁齋社・二〇一二年六月・一二〇〇〇元（二冊））

承繼編 上（八十七＋四十二＋一四十二＋五十二＋四五十八頁）、下（八十一＋四十二＋一四十二＋五十二＋三九四＋八頁）（台北：犁齋社・二〇一二年一月・一二〇〇〇元（二冊））

収録判例数は、各巻の凡例によれば、總則編が全二一四件（その内全文が整っているもの一七一件）、債權編が全八三五件（その内全文が整っているもの六三三件）、物權編が全三七九件（その内全文が整っているもの三〇九件）、親屬編が全四二八件（その内全文が整っているもの三二二件）、承繼編が全三三四件（その内全文が整っているもの一八七件）とのことである。總則編刊行後出版社が犖齋社に変更されたが、基本的な体裁は同じである。

各巻冒頭には導言として編纂の経緯や資料内容の解説が付されており、本資料集を扱う上で必読のものとなっている。さらに著者による「大理院司法檔案的整編與研究」（黃源盛『民初大理院與裁判』（台北・元照出版有限公司・二〇一一）所収）も読んでおくべきである。債權編以下には各巻に判決原本の影印数件が付されており、元々の資料の風合いを感じることができるようになっている。

各判決例原文は、中華民法法の編別に沿って配置されている。個々の判決例ではまず冒頭に案件番号が表示される。番号は通常「民国何年上字第何号」のような形で付されており、「上字」の「上」は上訴の意と推測される。他に「聲字」（付帶上告か？）、「私上字」（付帶私訴か？）などの番号も散見されるが、圧倒的多数には「上字」の番号が付されている。現在台湾では民刑事事件編號計數分案報結

實施要點（一九八一年發布、二〇一三年最新改正）により、個々の案件につきどのような案件番号を付するかが詳細に規定されているが、このような規定が北洋政府時期にもあったのかは俄かに明らかにし難い。

次いで判例要旨が掲げられる。旧来、郭衛『大理院判決例全書』（上海・會文堂新記書局・一九三一）、台北・成文出版社復刻版・一九七二）で窺うことができたものであるが、判決例全文と対照することが可能となり、判決例の一体どの部分を抽出して要旨としたのかがわかるようになっている。

その後判決例原文の全文が揭示される。まずは上告人、被上告人等の関係者が列挙され、判決主文、そして判決理由が続き、末尾には年月日、法廷名、裁判官名及び書記官名が記される。判決例原文は一三ポイントの活字で四〇字×一八行の組版で配されており、非常にゆつたりとしていて読みやすい。判決例の長さは概ね四頁前後のものが多くように見受けられるが、中には二〇頁にわたるうかという長大なものもある。

判決例原文がない場合には判例要旨の後に「本案判例全文缺」と表示されている。原資料が最早中国第二歴史檔案館にも存在しないということが確認できるのは重要である。特に民国五年分の資料については、当時の政治状況（洪憲

帝政による混乱?」の影響もあってか、集中的に欠落しているとのことである。これは大変残念ではあるが致し方ないことであろう。

三 利用にあたって

さて、この資料集を利用するにあたっては、(当たり前のことであるが)北洋政府時期の司法制度について一定の知識を得る必要がある。日本語で読める研究文献としては河合篤「中國の近代的司法制度」(『法學志林』四三—一、四四—八・一九四—一九四二)、及川恒忠「民國司法制度篇」(及川恒忠『支那政治組織の研究』(東京・啓成社・一九三三)所収)、岩田一郎『支那司法制度視察報告書』(東京)・支那司法制度調査委員会・一九二二)、梶川俊吉『中華民國司法制度』(東京)・司法研究所・一九四三)などがある。

また当時の大理院判決例の公開状況についても一定の知識を得る必要がある。これについては別の拙稿において述べた部分を引用しておく。

「大理院判決例については」まずは『司法公報』において断続的な全文公開が一九一四年末まで行われ、これと並行して『大理院判決録』が一九一四年七月分ま

で各月の民事・刑事判決例を全文収録する形で刊行されている。ところが、全文公開は此処までで途絶する。その後一九一五年十月、十二月に『司法公報』別冊の『大理院判例要旨目録』として判例の要旨のみが公開されるようになり、こうした要旨集はその後『大理院判例要旨匯覽』正編(北京、大理院、一九一九年)、続編(北京、大理院、一九二四年)に受け継がれ、最終的にはよく知られている郭衛『大理院判決例全書』(上海、会文堂新記書局、一九三二年)へと続いて行くことになる。

以上の状況から、大理院の判決例の全文を通覧しようとしても、北洋政府刊行の史料ではそれが叶わないことになる。民間の刊行物として天虛我生『大理院民事判決例』甲・庚編(上海、中華圖書館、一九一六—一八年)、同『大理院刑事判決例』甲・戊編(上海、中華圖書館、一九一六年—一八年)や『法律評論』誌上での判例紹介(一九二三年以降)がその欠を補う役割を当時から果たしていたようである⁴。

従って今回の資料集は、以上の資料状況の欠を補う重要なものであるといえる。逆にいえば、以上の文献にも著者の資料集にもない判決例となると、それを発見するのは相

当困難な作業となる訳である。

判例を扱うにあたっては同時代の判例研究も参考になる。上掲拙稿においても言及したが川村宗嗣『支那現行民事法法則』（東京…魯庵記念財團・一九二五）はその一例である。彼は同書出版後も同「支那司法状態研究資料 大理院判決例（一）」（四）『満蒙』七五〜七七、七九・一九二六」という形で大理院判決例の研究を継続しており、一読の価値がある。

これらを踏まえた上で実際に大理院の判決例を読んでみると、時々隔靴搔痒の感にとらわれることがある。というのも、上告審であり基本的に両当事者や裁判官たちにとってその事件の具体的経過は既知のものであるため、判決例の中ではごく簡単にその事実経過が述べられるに止まる訳であるが、読者たる現在の我々にとってそれは初めて接する情報であり、往々にして大理院判決例に簡潔に述べられた事実経過だけでは紛争の実態がよくつかめない場合があるからである。そのような場合に、この事件について第一審からの記録を順に読めないか、という気持ちになるのはごく自然なことであらう。

そう思い立った際に下級審の判決例を見ることができ資料として、例えば直隸高等審判廳編『直隸高等審判廳判牘集要』（天津…天津商務印書館・一九一五）がある。こ

大理院			直隸高等審判廳			原審	
案件番号	案件内容	言渡日	収録頁	案件内容	言渡日	管轄廳名	言渡日
3 年上字179号	債務糾葛	1914.4.2	1 卷25頁	撥款糾葛	1913.6.12	?	?
3 年上字187号	夥賃糾葛	1914.4.6	3 卷27頁	債務涉訟	1913.8.25	?	1913.7.4
3 年上字202号	欠款糾葛	1914.4.13	3 卷61頁	匯票糾葛	1913.9.24	?	1913.8.7
3 年上字214号	承繼涉訟	1914.4.17	1 卷152頁	家務糾葛	1913.11.3	?	1913.6.27
3 年上字228号	公司虧累涉訟	1914.4.21	3 卷14頁	公司虧款	1913.8.14	張家口地方分廳	1913.6.12
3 年上字247号	贖地糾葛	1914.4.27	2 卷92頁	霸地不贖	1913.8.27	滄縣	1912.7.6
3 年上字251号	山場涉訟	1914.4.28	2 卷112頁	山地涉訟	1913.9.14(16?)	盧龍縣	1913.4.29
3 年上字258号	廟產糾葛	1914.4.30	2 卷106頁	侵吞廟產	1913.9.8(9?)	玉田縣	1913.2.24
3 年上字262号	引岸涉訟	1914.5.1	2 卷130頁	引岸轆轤	1913.10.16(18?)	?	1913.7.19
3 年上字333号	地畝糾葛	1914.5.21	2 卷86頁	地畝涉訟	1913.8.26	景縣	1913.5.4
3 年上字340号	担保糾葛	1914.5.22	1 卷168頁	霸房糾葛	1913.11.25	?	1913.5.14

第九十五卷 四二六
れと『大理院判決録』を突き合わせる形で、高等審判庁・大理院双方の判決例を読むことのできるものを拾い上げると、とりあえずは別表のようになる。

難しいのは、大理院の判決例とそれに対応する下級審（高等審判庁）の判決例の双方がうまく見つかる場合がない訳ではないものの、現在の資料状況からはその確率はそう高くはなく、また仮にうまく接続する判決例が見つかった

としても、それが民国期の法理を支えるような重要な事件のものであるかどうかは全く予断を許さないということである。

下級審の判決例を知ることができる資料としては、清朝期のものに『各省審判廳判牘』（上海：法學研究社・一九一二、東京大學東洋文化研究所圖書館藏）、民国期のものに先の直隸高等審判廳編『直隸高等審判廳判牘集要』（天津：天津商務印書館・一九一五、上海圖書館藏）、さらには法律研究社編『浙江高等審判廳書判實錄』（上海：文明書局・一九一四、慶應義塾大學圖書館藏・上海圖書館藏）、『江蘇司法彙報』（蘇州：蘇州司法籌備處內收發課・一九二一・一三、天理大學圖書館藏）などが知られている。また評者はすべてを確認してはいないが、北京図書館編『民国時期總書目法律』（北京：書目文獻出版社・一九九〇）にも数点の判牘集を確認できる。今後は三木聰・山本英史・高橋芳郎編『伝統中国判牘資料目録』（東京：汲古書院・二〇一〇）の民国期版のような仕事が必要となるであろう。

四 おわりに

以下全く以て望蜀の極みであるが、資料集に関して些細な問題を指摘しておきたい。

まずは組版である。本文の組版は非常にゆったりとして

いて読みやすいが、例えばこれを一〇・五ポイントで二段組みにすればさらに多くの判決例が収録できたか、あるいは頁数を節約することができたかもしれない。これは好みの分かれるところであろうし、あまり欲張ってもいけないのであるが、もっと読みたいという気持ちにさせられるのはこれまた致し方のないことであろう。

また著者による導言は、この資料集を扱う上で必読の解題であるが、一冊全ての冒頭に収録される必要はあったのか、という点も気にはなる。おそらく五編のうちのある部分だけを購入する読者を想定してのことと思われるが、約五〇頁にわたる解題のため、一か所にまとめれば五〇〇頁強が浮いた計算になる。

さらに索引につき、キーワード（關鍵字）索引は付されているが、可能であれば案件番号での索引もあると便利だったかもしれない。他の資料等で民国何年何字第何号の判例という言葉及があつた場合にその番号から即座に探すことができるからである。

以上の問題は「敢えて挙げれば」というものであって、この資料集の価値を些かも減じるものではない。著者の二〇年にわたる苦心慘憺を思えば、いずれも取るに足りない問題点である。

今回の資料集の刊行によって、民国史研究に確固たる礎

が置かれたことは疑いない。その労は幾重にも労われるべきものであるが、信頼できる素材が提供された今、著者をも含んで我々が沈思しなければならないのは、この素材をどのように研究に結び付けてゆくかという問題である。それは法制史研究に限ったものではないこと勿論であり、多くの研究者を交えた議論が求められるところである。

また、評者が院生であったころはまさに判例の発見・整理が相次いだ時期であった。日本の判決原本保存運動に始まり、それらが植民地時期台湾、朝鮮へと波及し、今回の資料集に結実した大理院の判例についても奇しくも同時期に整理が行われている。今回の資料集の刊行によって、近代東アジア地域の判決例についてはほぼ出揃ったことになる。徒に話を広げてはいけなかもしれないが、こうした資料群相互の関連も、今後の検討課題となるであろう。

いずれにせよ、我々は著者から壮大な贈り物「宿題を受け取ったばかりである。しばらくは原資料に直に触れる喜びに浸りつつ、「その後」を考えてゆくこととしたい。

註

- (1) 施宣岑・趙銘忠主編『中国第二歴史檔案館簡明指南』(北京:檔案出版社・一九八七)二三頁に一頁のみのごく簡単なものではあるが紹介はなされており、存在自体

は知られていたが、実際にその資料に触れることができた外国人研究者は限られていたものと思われる。

- (2) 黃源盛「民初大理院司法檔案的典藏整理與研究」《政法學評論》五九・一九九八。参照。同じ題名のものが中國法制史學會編輯『兩岸現存司法檔案之保存整理及研究學術研討會論文集』(台北:國立政治大學法學院基礎法學中心・一九九八)、黃源盛『民初法律變遷與裁判(一九二一—一九二八)』(台北:國立政治大學法學叢書四七・二〇〇〇)にも収録されている。

- (3) 犁齋法制史料叢編として以下の資料集が刊行されている。

- 第一 黃源盛纂輯『平政院裁決錄存』(台北:黃源盛出版・二〇〇七、拙評『國家學會雜誌』一二一—七八・二〇〇八) 参照)
- 第二 黃源盛纂輯『景印大理院民事判例百選』(台北:五南圖書出版股份有限公司・二〇〇九)
- 第三 黃源盛纂輯『晚清民國刑法史料輯注』上下(台北:元照出版有限公司・二〇一〇、黃源盛(拙訳)『晚清民國刑法史料輯注』の編纂を終えて)『法史學研究会會報』一五・二〇一一) 参照)
- (4) 拙稿「中華民國民法に至る立法過程の初歩的検討」『中國近世の規範と秩序』(東京:研文出版・二〇一四)

所収予定) 参照。また拙稿「法制史」(岡本隆司・吉澤誠一郎編『近代中国研究入門』(東京: 東京大学出版会・二〇一二) 所収) も参照されたい。

(5) 日本の明治期以降の判決原本の保存をめぐる問題につき林屋礼二・石井紫郎・青山善充『図説 判決原本の遺産』(東京: 信山社・一九九八)、またこれらを利用した研究の代表的なものとして林屋礼二・石井紫郎・青山善充『明治前期の法と裁判』(東京: 信山社・二〇〇三)を参照されたい。明治二三年までの民事判決原本については、国際日本文化研究センターのホームページにて、利用申請を経て利用することができ(<http://db.nichibun.ac.jp/ja/category/minji.html>)。植民地時期台湾における判決については要旨集として台湾総督府覆審・高等法院編纂『覆審・高等 法院判例』(東京: 文生書院・一九九四)があったが、その後判決原本の整理が進み、日治法院檔案資料庫 (http://tcra.lib.ntu.edu.tw/tcra_develop/) として公開されている。これらをめぐる研究の代表的なものとして王泰升主編『跨界的日治法院檔案研究』(台北: 元照出版有限公司・二〇〇九) がある。また台湾法務部司法官訓練所蔵刑事裁判記録については平成一六年度(平成一九年度科学研究費補助金(基盤研究(A)) 研究成果報告書『東アジアにおける近代法形成と法の回廊

に関する実証的研究』(課題番号16203001・研究代表者浅古弘) に目録がある。朝鮮については最近『復刻版 朝鮮高等法院判決録 明治四一年(昭和一八年)』(東京: 雄松堂出版・二〇一三、 http://www.yushodo.co.jp/press/cs_hanketsunoku/) が公刊された。

(二〇一二年、台北: 元照出版有限公司及び犁齋社、B5判)

(九州大学法学研究院・准教授)